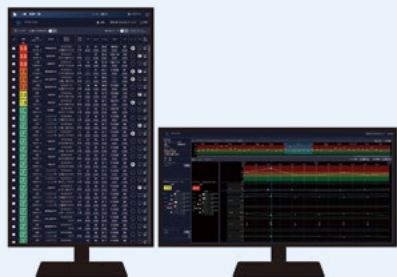


NEW 国内で患者容態把握ダッシュボードソフトウェア QH-101N を発売

本ソフトウェアは、院内における患者さんの容態急変・悪化の予防を目的として各医療機関で構築される院内迅速対応システム(RRS)^{※1}を支援するためのソフトウェアです。電子カルテから取得した患者さんのバイタルサイン(呼吸数、SpO₂、血圧、体温、脈拍などの生体情報)をもとに演算した早期警戒スコア(EWS)^{※2}の値が変化した場合にRRSを起動し、患者さんの容態悪化の未然防止、予後改善を支援します。プログラム医療機器



(SaMD: Software as Medical Device) として認証を取得しており、国内の急性期病院を中心に2025年1月から月額利用料制で提供する予定です。

※1 院内迅速対応システム: RRS (Rapid Response System)。入院患者さんの容態急変の兆候を捉えて対応する体制。

※2 早期警戒スコア: EWS (Early Warning Score)。患者さんのバイタルサインを点数化し、急変リスクを早期に発見。

開発者の声 医療機関との共創により実現した現場志向の使いやすさ

本ソフトウェアの開発においては、患者さんの容態急変・悪化の予防という目的を実現するために、RRSの実際の運用にフォーカスした使いやすさを提供することを目指しました。医療機関の見学に加え、医師や診療看護師等の幅広いユーザとのディスカッションに基づいて試作を重ね、実際に運用評価いただくことを繰り返すことで、徹底的に機能を取捨選択・統合しました。

本ソフトウェアは、1,000名を超える多くの患者さんの最新スコアをスムーズに一覧表示できることから、優れた視認性・操作性と合わせて、容態の急変に対する早期介入と予後の改善を効果的に支援できると信じています。



技術開発本部
DHS技術開発部
第一技術部 二課長
川村 修平

NEW 米国で遠隔ICUソリューション RemoteSense を発売

本ソリューションでは、複数医療機関のICUにいる患者さんの容態をウェブブラウザで遠隔モニタリングすることができます。患者さんの安全管理と早期の治療介入の支援を目指し、米国の日本光電デジタルヘルスソリューションズで開発しました。患者さんのバイタルサイン(心電図、SpO₂などの生体情報)や波形情報に加え、アラーム情報もリアルタイムで確認できるため、医療従事者の業務効率向上への貢献も期待しています。他社の医療機器も接続・統合できることから、長期ビジョンで掲げる



DHS(デジタルヘルスソリューション)構想の実現に向けて、高度なデジタルヘルスプラットフォームの提供に注力します。

開発者の声 米国ユーザの声をもとに開発したDHS製品による医療課題の解決に向けて

RemoteSenseは、院内外の患者さんの情報を参照できる遠隔ICUソリューションで、生体情報モニタのポートフォリオに新たに追加しました。当社のデジタルヘルスプラットフォームとの統合により、複数の医療機関の様々な医療機器のデータやアルゴリズム演算結果をウェブブラウザに表示できるため、専用機器が必要ありません。開発中に一番大変だったのは、高機能と使いやすさのバランスを取ることでしたが、ウェブアプリ設計ツールの活用や医師の意見等を取り入れることで、乗り越えることができました。お客様からは使いやすさに高評価をいただいています。



日本光電デジタルヘルスソリューションズ LLC
President and CEO
Harsh Dharwad

NEW インドで検体検査試薬の新工場が本格稼働開始

インドにおける検体検査装置の設置拡大、試薬の需要増加に対応し、生産能力の増強を図るため、2024年9月に新工場が本格稼働を開始しました。インドでは国産優遇が進んでいることから、本工場で医療機器の生産準備も進めています。



インド 検体検査試薬 新工場



試薬製造タンク